

ふくりゅう

発行所 日本下水文化研究会運営委員会
 発行責任者 酒井 彰(運営委員会副代表)
 発行年月日 平成10年12月15日
 印刷所 (株)愛 甲 社
 編集 小松建司 高橋敬一 斉藤由勝
 冬号(通巻14号)

世の中は良い方向へ動いている シンポジウム開催報告

「下水文化を継承することの意味を考える」

11月27日(金)の午後、新宿住友ビル10階特設会議室において、当会の企画による「シンポジウム・下水文化を継承することの意味を考える」が開催されました。これは、今年「下水道博物館情報交流会議」が東京で開催されることと、昨年(平成9年)建設省から「下水道に関わる文化・歴史の保全と継承」という施策が出されたことに合わせて企画したものです。当日は平日の午後にも関わらず参加者は、50名を越えました。

講演は、当会運営委員会委員長 酒井彰氏(流通科学大学教授)の「下水に対する新たな認識形成のために」から始まりました。酒井氏は水道・下水道は便利になるにしたがって人々の意識が遠のいてしまったこと、市民と水との距離を近づけるために、水道や下水道が都市の学ぶ装置として利用されてきた時代であることを話され、環境教育や情報開示が大切であることを話され、水についての認識を深めることの大切さを訴えました。

続いて、当会評議員の岡 並木氏(武蔵野

女子大学講師)から「都市装置のなりたちと文化」の講演がありました。岡氏は文化とか文明というものは、定義しにくいものであるが、文明というのは装置(施設)であり、文化は人の思いやりや心と考えていると前置きから移路標識や舗装、下水道などのなりたちから対症療法(捨てる)と原因療法(自然に返す)を西洋と日本とで対比させながら、文明が文化に時代とともに向上していることを述べられました。

休憩のあと、バルトン忌や下水文化を見る会でお世話になっている堀 勇良氏(文化庁文化財保護部)は、「文化財を保存・保全することの意味」について講演されました。堀氏はどの様なものが文化財指定の対象になるのかをスライドを使い説明され、現在のところ下水道の文化財指定は横浜市に残されている外人居留地のマンホール1件のみであり、これからは下水道が都市の装置から文化になれば、市民の関心を引き起こすことになることと述べられました。

最後は当会運営委員の柳下重雄氏から「江戸神田の下水と人々とのかかわり」と題して、江戸時代の神田地域の人々が町の下水道のごみ浚いや補修工事経費の分担など維持管理について、町方と奉行所とのやりとりを例にして講演されました。

(栗田)

98年度第2回定例研究会での感想

第2回定例研究会の反響が大きく以下の感想文が氷上氏、白子氏より寄せられたので紹介します。

氷上克一氏

今回の研究会(9月25日)は、「地球環境時代」とか「環境ホルモン」といったいま話題にはなっているが、私にとってその内容が今ひとつぼやけた感じである文言を含むテーマなので、この際少しでも理解を深めたいと思い出席した。研究会では二つのテーマが用意されていて、それぞれ膨大な内容の割には短時間の講演であった。いずれも、機会があればじっくりと聞きたい話である。

1.谷口季幸氏の「地球環境時代の都市づくりの考え方」について

氏の長年の経験と研究の成果が披露された感じがする。全体にわたって明解で歯切れが良く聞きやすい講演であった。今まで地球温暖化を防ぐにはCO₂の排出量を減らさなければならないし、まちづくりや建設に伴ってCO₂が

排出すること説明はよく聞いた。できあがった後のCO₂排出量削減がキーポイントになるという説明には「ハッ!」とするものがあった。日本における干潟問題に現れている行政のあり方や、土木建築屋だけのまちづくりの様子を聞くと、いま取り組まなければいけない地球規模の環境保全に対しては、日本はリーダーシップがとれないのではないかと心配になった。

2.住山真氏の「英国における環境ホルモン対策への取り組み」について

1週間という短期間の訪英ではあったが、氏の報告講演は実に内容豊富であった。まず驚きは、EDC(いわゆる環境ホルモンのこと)に関して先進国だと思っていた英国で市民の関心あまり高くないという話。日本でも大変な問題だといいいながら、どうすればいいかがさっぱり解らない実情である。しかし、魚の精巢の写像を見せられると、これは大変な問題なのだと思筋が寒くなる思いがした。最近、男らしい男性が少ないのはEDCの影響ではないかと思いたくなる。講演にもあった医療用の女性ホルモンも問題になっていることは、別のところでも聞いてびっくりしたことがあ

った。EDSと下水道との関係をもっとはっきりさせて、因果関係があるならその対策を講じる必要があるのかもしれない。

このEDCの問題は、物質が特定された後にどうすればいいのかその方策の確立も併せて進める必要があると思う。以上

白子定治氏

谷口季幸氏「地球環境時代の都市づくり」の講演感想

歴史を振り返れば、古くは農村で仕事のない人たちが都市に集まり構成員となり、生活は快適とは言えない状態だったようだ。例えば、現在では趣のあるとされているポンペイの石畳も実は単に道路としての機能を持っているだけでは無かったと聞く。町にひしめいて生活していた人々が石畳にごみや汚物を捨て、現在の美しい道とはだいぶ違った様相を示していたようだ。また、テムズ川に水洗便所排水が流され、腐敗していた頃の都市在住の男子の平均寿命は40歳に満たなかったという。

21世紀を迎え、世界の人口増加が最も問題となっている今日、後進国では都市への人口の集中が加速している。現在の都市は、仮の住まいではなく長期間にわたり人々が生活してゆく主要な場所になっている。このような中で都市の住民が、自らが存在する空間を快適にしようとするのは人情である。都市は、暮らして行ければよい場所から、より高度な価値を持った場所へと変わるべきだと人々の意識が目覚め始めている。ここに思想を持った都市づくりが生まれてくる。「基本は独自にアイデンティティを持った街づくりであり、①アメニティ環境創造、②エネルギー循環型都市システム、③サステナビリティシステムの三つの観点で捉える」と講演は明快であった。

小生は、特にエネルギーについて関心が強い。現代は、石油、天然ガス、原子力といった限りある埋蔵燃料を用いて発電し或いは自動車を走らせ、人間の力を誇示している。この科学に基礎を置いた現代文明は、消滅させることはおろか台風の進路を変えることすら出来ない。もちろん、近年問題となっているエルニーニョなど海水温の変化による気象変動にも全くお手上げである。自然のエネルギーは現在の技術では制御できない程桁違いに大きい。シュツットガルト市の都市計画は、このような自然を知り、そのエネルギーを利用した好例である。若干のロマンを感じながら楽しく拝聴させていただくことが出来た。このような考えをより小さな空間であるブルに適用し、内部の温度差による気流を考慮した省エネルギー構造を取ることが出来れば少ないエネルギーで快適な室内環境が実現するのでは無かろうかと考えたりした。

三番目のサステナビリティについてのウブサラの例は、92%の石油依存率が5%にまで落とすという実例には、脱石油化を目指す現在、勇気づけられる思いがした。

一番目のアメニティは、思いのほか重要であり難しいと考える。人の心までも変えてしまうのではなからうか。20年

程前オランダのボンエルフが注目された頃、街を歩き、道路の単調さに気づいた。現在では多くの都市では道が楽しい。カーの敷石でも銀座と新宿ではまるで違う。舗装がその街を表現すらしている。平坦な街から複雑で個性のある街へ、地球環境時代の都市づくりは街を豊かに楽しくするのでは無かろうか。そして講演で例示された都市のように街づくりの思想が明らかであれば、住人に誇りすら生まれる。このような街づくりを実現する大きな原動力のひとつは思想の定着と考える。それ故、講演の中での「思想がおかしいと環境は変えられない」との一節に含蓄を覚えた。

住山真氏「英国の環境ホルモン対応」講演感想

前の話では、「地球環境時代の都市づくり」という、都市という大きなスケールを対象に、さらに地球スケールの視点から論じられた。これに対し最近問題になっている環境ホルモンは、極微量の、百万分の一或いは一億分の一という超微量の化学物質の問題である。こんなに低濃度の化学物質が生物の種族を絶滅の危機に晒すのだから生物は実にシビアな条件の下に存続していられるに過ぎないのである。

ダイオキシンの例に見られるように、直接関知できない問題に対し、日本政府の対応は非常に遅い。しかし、「奪われし未来」が出版されたことにより、内分泌攪乱物質(環境ホルモン)の恐ろしさが明確に警告され、国の一部での対応はこれまでに速かった。

多くのヨーロッパの国々では日本よりずっと以前から人工化学物質への関心は高かったため、[英国からの報告には期待が持たれた。講演報告の中で、とりわけ内分泌攪乱物質のレポートを国民に配付し、意見を聴取したとの報告は、日本では奇異ですらあった。真の民主主義が定着している民主国家ならではの対応であろう。多くの内分泌攪乱物質の中で、界面活性剤に起因するアルキルフェノール類が注目されていた。この物質は、日本を始め世界共通の問題物質であり、国による対応の違いが注目される。英国の対応で注目されるべきは、年間1600トンも生産されているノルフェノールポリエチレンの生産禁止という具体的で強力な対応策を既に決定している点である。単に調査のみでなく、対応策を決定したところに人権意識の高さは何える。また、微量であっても人間のホルモンの影響を受けやすい酵母に対する応答を調査しているところに研究者として興味を覚えた。内分泌攪乱物質のように多くの生物が影響を受け、長期にわたる調査研究により初めて明らかになる種類の影響への対応は、人類始まって以来のことであろう。暗中模索の面があり対応策の選択肢は非常に多いうえ、認識されていない対応策もあるだろう。このような場合、欧米を始めとした先進国の情報を集めることが、よりの確かな対応に結びつくと考えられる。本講演は、多くのスライドを交えた解りやすく示唆に富んだものであり、このような要請に応えるものであった。

初めて下水道文化研究会に参加させていただきありがとうございました。これからの時代の知識人の集まりとの感觸を受けることができました。

活動報告

【関西支部】

大阪府下水道フェスティバルに バルトン記念展示

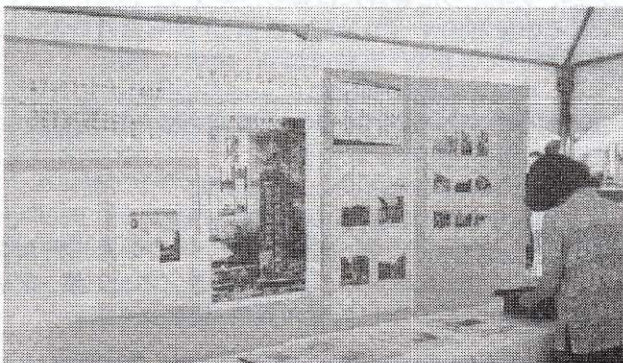
大阪府下水道フェスティバルが9月5日大和川流域下水道大井処理場の上屋の人工地盤上で開かれました。本会支部は、パネル展示、滋賀県環境生協製作のリサイクル製品の無料配付、それに幼稚園児などを対象にした紙芝居などを行いました。特に今年はバルトン先生百回忌にちなみ、写真を中心にバルトン先生の業績を紹介した小展示を行いました。

好天に恵まれ、沢山の人が会場を訪れました。最新刊の『有害廃棄物の安全な取り扱いガイド』は、関心と呼び、「どうしても欲しい」という人が10名ほどいて、無料で差し上げました。

廃食油のリサイクル製品・石鹸類とBDF(植物性ディーゼル燃料)、特に石鹸類には関心が深く、琵琶湖を守るために滋賀県民が頑張ってくれているのだから自分達も何かしなければ、という人もいました。ただBDFにはかなりの警戒心があるようでした。

(文責・蓼食虫a)

【写真】バルトン記念展示



'98水環境セミナーに百人が参集！

98水環境セミナーが京大会館で9月6日開催されました。この日は日曜日で、しかも朝から雨でしたが、参加者が100人を越える盛況でした。

統一テーマは、バルトン100回忌に寄せて、改めて水源問題を考えることでした。この観点から京大の松井三郎教授に「水のリスク管理と下水道の新しい役割」と題する記念講演をお願いしました。さらに大阪市の高度浄水処理事業の顔面と今後の展望を当時のご担当の松本宏一郎氏(日本水道協会大阪支所長)に、欧米の民営化論の最新動向を椿本祐弘氏(大和総研)に話していただきました。いずれも極めて示唆に富むお話で、目から鱗が落ちる思いがしました。しかし、特筆すべきは、本会の谷口氏が『有害廃棄物の安全な取り扱いガイド』を用いて話された講演に強い関心が集まったことです。この講演のために、大阪友の会の幹部のご婦人5名、滋賀県環境生協の藤井絢子理事長、芦屋市国際学級の松田祥子さんが駆け付けられました。京大の松井先生と神大の神吉和夫先生からもガイドに対して高い評価が与えられました。

(文責・蓼食虫a)

【写真】98水環境セミナー



【し尿研究会】

平成10年10月30日、飯田橋ボランティアセンターで下水道文化研究会し尿研究会が催された。参加者は8名、今回の研究テーマは「東京のし尿処理の変遷」、情報提供者は東京都清掃局の石井明男さんでした。

内容は凡そ奈良時代のし尿が肥料として使われだした時代から、大正時代のし尿が肥料としての価値を失い、し尿のくみ取りに費用が掛かるようになった時期の話、その後東京市はし尿処理には苦勞の連続であった。時代とともにし尿処理は下水道に移り現在に至っているが、ここきてし尿の収集量が少なくなった。最後に下水道に移行する状況が話された。

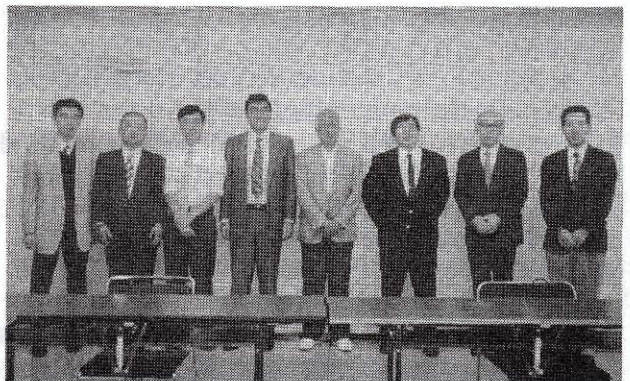
この会は3ヵ月に1回催される事になった。

今回は東京都下水道局の地田さん「みやこ肥料のこと(砂町消化槽の汚泥から作った肥料)」、その次は東京都清掃局OBの鈴木和雄さん「東京都綾瀬し尿作業所(昭和8年に稼働した活性汚泥法のし尿処理場)」についての話

が予定されている。

楽しみな、興味ある会となりそうである。

事務局記



CDの紹介

GACD-001 五十川 晋一
 『奥多摩物語 痕』 CD ¥2,380-
 曝首/太古樹/遙かなる伝言/野分/還る 他全10曲

東京在住のマルチ・インストゥメンタリスト、五十川晋一の、様々なアパラチア楽器を使ったニュー・エイジ調アルバム。「奥秩父、多摩の自然、歴史、伝説、事件等を題材にした山岳紀行音楽」という。ダルシマ、マンドリン、バンジュー、フィドル、ペダル・スティール等の他、オカリナやハーモニカ等も使って「高校時代の1970年代初期、ブルグラスに熱中した世代」であり「多摩川の水を飲んで育った」彼が、「結局ブルグラスやマウンテン・ミュージックで使われる楽器の音色が一番性に合って」アパラチアの響きで創ったという奥多摩の物語。こうして聴くと東洋的な広がりさえ持つアパラチアの楽器が、共に大都会の近くに広がる秩父とアパラチアという幻想的な山の響きを創り出す。ルーツ音楽を現在の視点から眺めれば、国境はもちろん、民族の壁も、民俗の特殊性さえもが取り払われつつあるようだ。

新刊紹介

孫が綴る 横浜・近代水道の創設者
 『祖父パーマー』 樋口次郎・著

書名にあるように、わが国近代水道の恩人であるパーマーの孫に当たる著者が、二十年にわたって祖父の事跡を調べ上げ、その多面的な人間像を描き出したものである。

ヘンリー・S・パーマーは英国軍人で、明治18年に来日し、わが国初の近代水道である横浜市水道の設計・監督に当たったのは水道関係者に知られているが、他にも横浜築港や横浜ドックなども手がけ、自然科学者としても活躍、わが国近代化に貢献した。

著者は少年の頃、母から祖父パーマーが横浜水道の設計・監督をしたことは聞いており、パーマーの数少ない遺品の中に、東京通信員として英本国に送った通信文を

お知らせ

◎NPO法について

前にもお知らせいたしましたが、いよいよ特定非営利活動促進法(NPO法)による受付が12月1日から東京都でも開始され、初日は3団体の申し込みがあったとのことです。経過措置として、来年の5月31日まで申請分については来年の9月30日まで認証、不認証の決定を行うこととなっております。当会でもNPO法による法人資格を得る方向で考えておりますが、メリットとデメリットが当然あります。皆様方のご意見を当会運営委員会(ふくりゅう宛先と同じ)までお寄せください。

◎会費未納者の請求について

11月30日現在で未納の方について、12月末頃、会費納入の請求書を出しますので、お忘れの方はお早めに納入して下さい。また、行き違いがありましたら破棄して下さい。宜しくお願い致します。

1 略歴 五十川晋一

1956年東京生まれ。高校時代にアメリカのフォーク、ブルグラス、マウンテンミュージックに惹かれ作曲、演奏活動を開始。その後あらゆる音楽ジャンルを通して民族楽器を含めた様々な弦楽器の音色に触れる。絵画や多色刷り版画のように個人で音楽を制作する夢を持ち続けるが1932年に個人向けマルチトラックレコーダーを初体験、実現のきっかけを掴む。多摩川の源流である奥秩父、多摩の山歩きを趣味とし、1983年より自らの足で吸集した自然、歴史、伝説、事件等を題材にした「奥多摩物語」の制作を開始。現任は、オリジナル邦楽工房「ほうきぼし」に参加、邦楽器のアンサンブルも手掛ける一方、日本人の音色のルーツ探しを始める。東洋音楽学会、日本音響学会会員。



まとめた「日出ずる国からの手紙」という題の本が一冊あったが、少年だった著者には難しい英文で、忘れかけていた。その後パーマーの遺作を翻訳し「黎明期の日本からの手紙」として出版(筑摩書房刊、絶版)。翻訳していくうちに、祖父の人柄や見聞の広さ、さらには日本に対する愛情の深さを知ってパーマーの研究を始めることになった。

パーマーは、相模川の上流に水源を求め、横浜の市街まで約四十四キロに鉄管の導水管を布設、約二年半で完成させた。さらに、大阪、函館、東京、神戸の水道計画をつくるとともに、兵庫県内の農業用水サイホン工事、東京・王子の印刷局の浄化装置の設計・監督にも携わっている。

【新書版、240ページ、定価千円(税別)。発行・有隣堂＝横浜市 ☎045(825)5563 FAX同3910

◎稲場氏が「東京人・12月号」に神田下水のことを書かれています。

◎「ふくりゅう」では 原稿を募集 しています。身近な話題などでも結構ですので送ってください。又、「ふくりゅう」に対する意見等もどしどし送ってください。

宛先

〒135-0016 東京都江東区東陽7-1-14
 東京都下水道局東部第一管理事務所業務課
 小松 建司 FAX 043-294-6127
 E-mail k-komatsu@pop12.odn.ne.jp

編集後記

大変遅くなりました。下水道文化研究第10号がやっとできました。このふくりゅうと共にお手元に届いていると思います。